くい要因が，その点に求められる。

このうちＢは，従来から指摘されているように，出現期に受けた須恵器窯（地下式直立煙道窯）からの影響と考えられる。しかし，Ａは須恵器窯と印象が異なり，むしろ同時期の横口式木炭窯の影響とみた方が妥当と推定される。このことは，両者に共有されるきわめて長大な類似形態に，明確に示されている（図53－１・２）。

ところでまだ資料は少ないものの，９世紀後半～10世紀前半に新しい変化が認められる。図55－７の丸い焼成部は，それまでの内部変遷に系譜が追えず，茨城～千葉県域の「いちじく形」と類似する。その背景としては，まず，北関東に近い所在遺跡の地理的要因（浜通り地方中部）が想定されるが，もう１つの選択肢としては，新しい技術交流が引き起こした可能性がある。

さらに増して重要なのは，図55－５と考えられる。本遺跡と同一の焼成部・煙道構造が備わっており，部分的特徴の類似は，同図12・13にも指摘される（註24）。それらの位置関係は，本遺跡―同図11・13間で約30ｋｍ，本遺跡―同図12間では，阿武隈高地をはさんで60kmも離れており，まだ資料は少ないが，当時の陸奥南部の広範囲で共通の傾向であったことが知られる。そうすると，本遺跡の木炭窯は，強く全体にそれが反映されたものと評価することができると考えられる。

なお同図12・13は，複数の煙道が同時に付いていた可能性があり，他地域との相互関係をみる上で，注意を要する（後述）。

他地域の動向と陸奥南部の相互関係

では，さらに視野を広げて上でみた陸奥南部の変化が，須恵器窯型木炭窯分布圏の中でどのような位置づけになるのか，次に検討したい。ここでは，太平洋側を３地域，日本海側を２地域に区分する（図55・56）。

◎太平洋側：陸奥中部（宮城県仙台湾周辺）・同北部（岩手県北上盆地）・関東

◎日本海側：出羽北部（秋田県秋田平野以北）・北陸

（１）太平洋側

陸奥中部と関東は，浜通り地方と対応する期間の変遷が判明している。しかし，陸奥北部で確認できるのは，９世紀後半～10世紀前半のみである。

【陸奥中部】　仙台湾周辺を含む当地域では，築窯方式と焼成部平面形の基本原則が，浜通り地方と一致する。しかし，煙道位置に関しては，既に，８世紀末～９世紀初頭から床面と接している事例が確認できる。そのため，両地域の変遷が同一視された飯村案は，前提が崩れてしまう。図55－４は，奥壁に１つ付き，単純な地山掘り抜きで構築されている。また同図３は，側壁に複数付いて，障壁が貼られている。この構造は，陸奥南部の同図12と完全に同一である。さらに，報告書からでは読み取りにくいが，床面付近に１つ付いている事例は８世紀前半以前まで遡る可能性があり（柏木遺跡４号木炭窯），その場合には，出現当初からこの属性が備わっていたことになる。ただし，逆台形を呈した焼成部の事例は，今のところ確認できない。

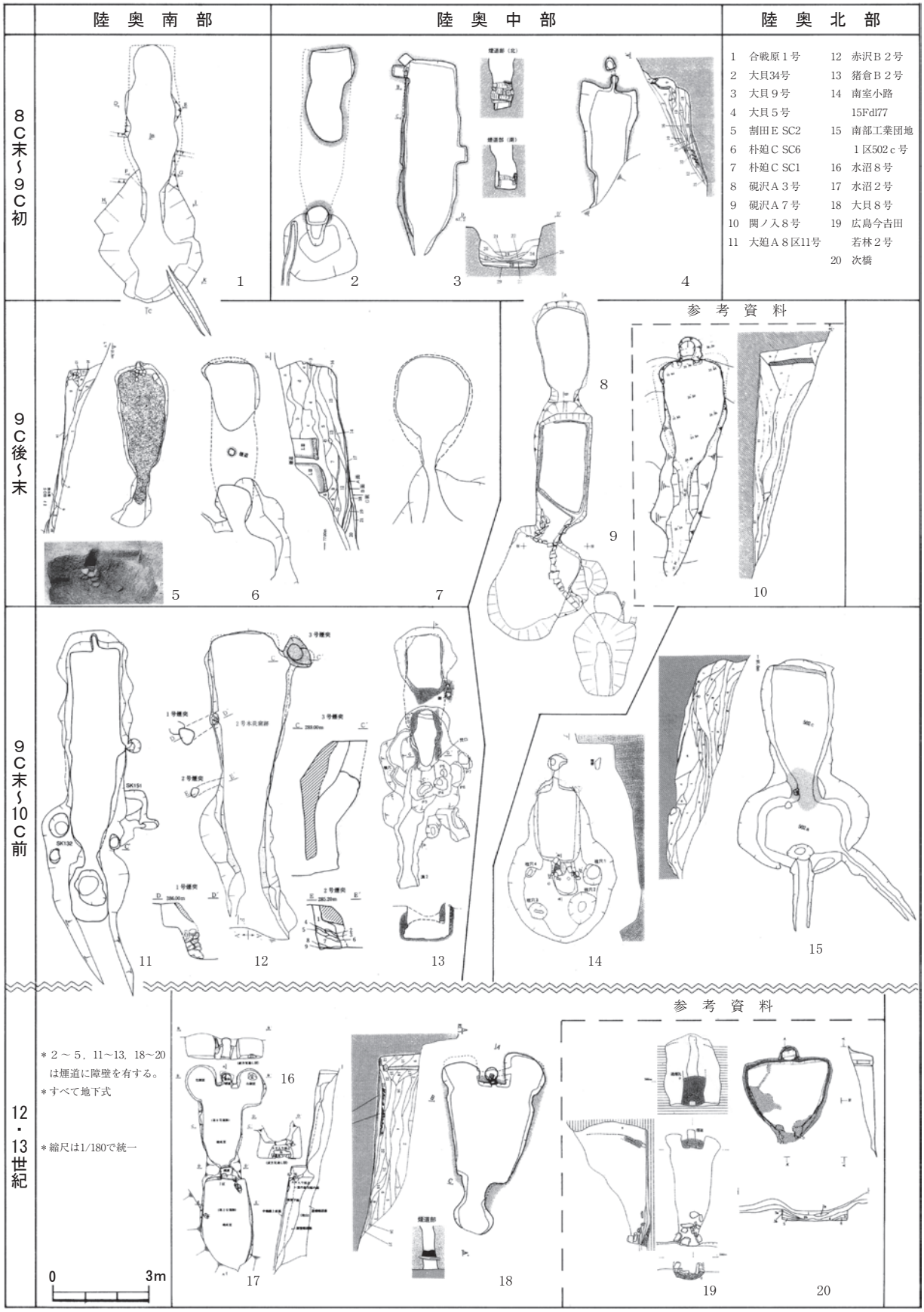

図55　陸奥の木炭窯跡変遷

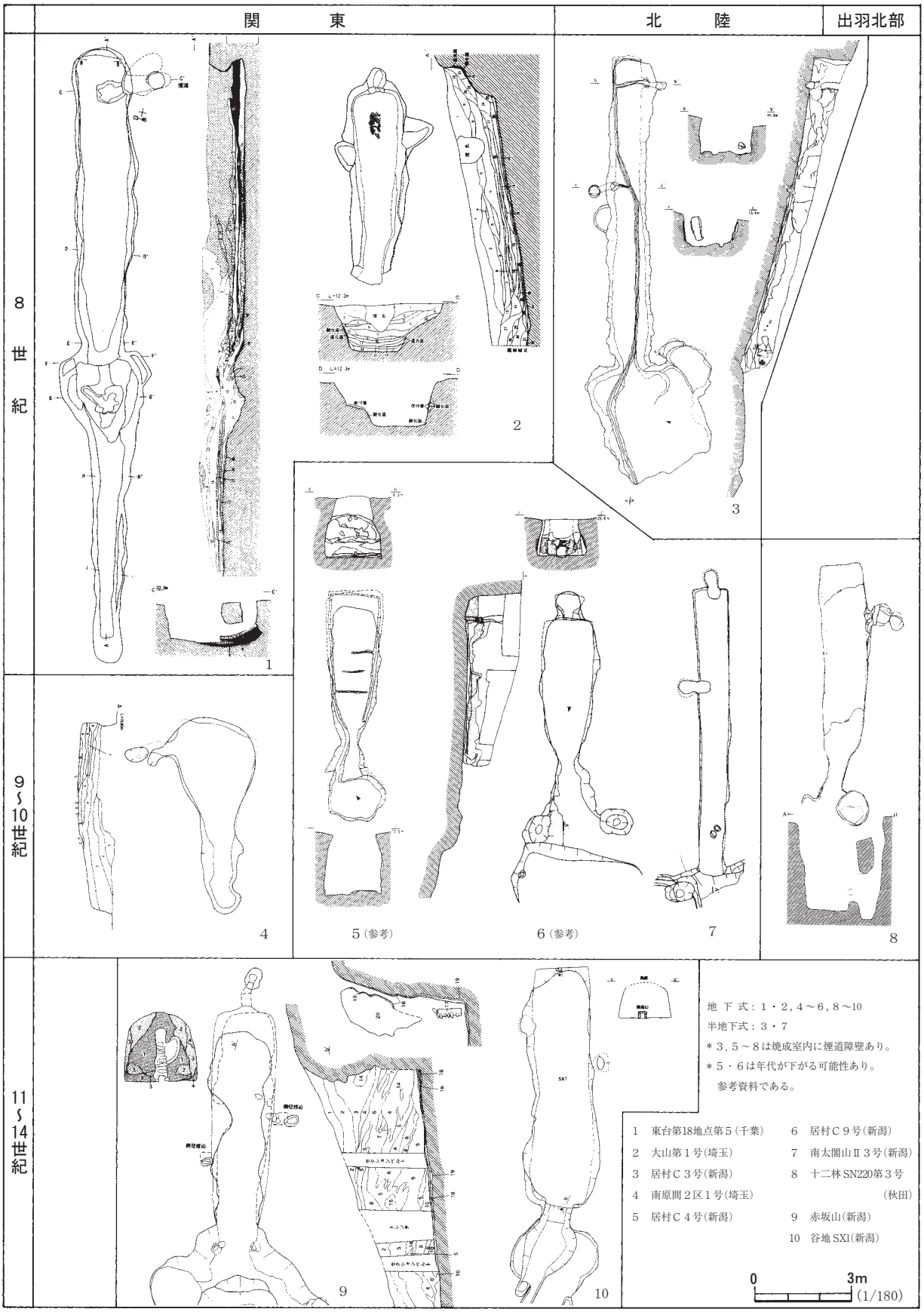

図56　周辺の木炭窯跡変遷

なお，12世紀前半出現の副室付木炭窯(同図16・18) は，東海に系譜関係が求められている(註25)。しかし，類例は広島県今吉田若林遺跡などでも確認され(同図19)，なお検討が必要と思われる。ちなみに，祖型のような形態が９世紀の遺構群に混じって検出されているが(同図11)，共存関係は明確でない。

【関東地方】 当地域でも，陸奥中部と同じ状況が認められる。築窯方式と焼成部平面形の基本原則が，陸奥南部と一致するのに対し，煙道位置は当初から床面と接して，数が複数の場合がある。ただし，障壁の貼られる構築方法は，一般的ではない。また，９世紀後半以降になると，焼成部が小型で寸詰まりの事例が目立ち(図56－４)，築窯方式が半地下式の事例が群馬県域中心に普及し始める。これは，須恵器窯に連動した変化と考えられる。

なお，このことは内容が異なるが，９世紀後半以降に新たな変化が起きるという点では，陸奥南部と共通の現象と捉えられる。

【陸奥北部】 当地域では，築窯方式が地下式で，焼成部が逆台形を呈した事例(図55－15)，同じく地下式で，煙道が奥壁の床面と接している位置に付く事例(同図14)が確認できる。両者の年代は，陸奥南部で変化の起きた時期と重なっており，相互関係は明らかと考えられる。そうすると，中間位置にあたる陸奥南部でも，今後，焼成部逆台形の事例が発見される可能性が指摘される。

(２)日本海側

北陸は，８世紀初頭以前～14世紀まで，古代から中世にまたがる連続的な変遷が捉えられている(註26・27・28)。しかし，秋田平野で確認できるのは，９世紀末～10世紀前半のみである。

【北陸地方】 当地域では，築窯方式の基本原則が，太平洋側とまったく異なる。須恵器窯に連動して，９世紀後半以前は半地下式でほぼ独占され，焼成部形態は横口式に類似する(図56－３・７)。これは，西日本～北陸に広がる木炭窯分布圏の特徴である。また煙道は，当初から床面と接する位置に複数付き，障壁の貼られる構築方法が一般的に認められる(註29)。

しかし，陸奥南部で変化の起きた時期に様相が激変し，同地域側に接近していく。須恵器窯とは無関係に，築窯方式が地下式へ集約され，窯体が縦に短くなる。そして，焼成部が逆台形化を呈した事例(同図５)，煙道が奥壁(同図５)あるいは天井(同図６)に１つだけ付いている事例が現れる。

ただ，陸奥南部では，斜面横置きの大型土坑タイプにすぐ入れ替わっていくのに対し，北陸では，中世まで長く維持される(同図９・10)。したがって，類似様相は一時的な現象であり，両地域間には，再び大きな違いが横たわる。

【出羽北部】 当地域では，築窯方式が地下式で，煙道が側壁で床面と接している事例が確認できる(同図８)。年代は，陸奥南部で変化の起きた時期と重なり，これも広域間現象の一つと捉えられる。

小　結

以上の内容から，次のことが指摘される。

(1) 煙道の数が１つしかなく，位置が天井に集中する昇焔式の木炭窯は，陸奥南部固有のものである。これは，出現期に須恵器窯構造を忠実に模倣し，長く遵守した結果とみられる。しかし，他地域では，当初から煙道の数が複数で，現代の民俗例と同じように，床面と接した例焔式が一般的である。また，築窯方式は須恵器窯に連動して，柔軟に姿を変える。

　このようにみると，当地域は保守性の強い，個性的な木炭窯分布圏と言える。また，それは，古代箱型製鉄炉の羽口送風技術が，陸奥南部に限定される現象と対応するように思われる。

(2) しかし，９世紀後半以降に，それが一部解消へ向かう。とくに，北陸とは同一の焼成部形態（逆台形）が共有され，陸奥南部では，北陸に最も一般的な煙道構造（例焔式）が普及する。逆に北陸では，築窯方式が変化（半地下式→地下式）して，陸奥南部特有の煙道構造（昇焔式）が認められるようになっている。こうしたことから，奥羽脊梁山脈をまたぐ東西間交流の存在が想定可能と思われる。

　このことは，北陸の築窯方式の変化が，在地の須恵器窯と連動せず，外部に要因が求められることと合致する。北陸側では早くからその可能性が指摘されていたが(註30)，改めてその重要性を認識する必要があるのではなかろうか。

９世紀後半の変化の意義

最後に，この変化の意義に触れておきたい。９世紀後半は，陸奥南部とって中世的社会へ向かう画期に位置付けられる。在地社会の根幹となる集落動向に注目すると，９世紀前半にピークを迎えた集村化傾向は急激に衰退し，正直Ｃ・東山田型豪族居宅が姿を消していく(註31)。したがって，製鉄産業の転換も，手工業生産分野に反映されたその一端と理解できる。

冒頭で述べたように，浜通り地方では，生産地の中心分布が海岸部から山沿いに移動した。そして，まるでこの動きに対応するかのように，寺院（植松廃寺）・関連瓦窯（入道廻・京塚沢窯跡）が山沿いに新設されており，社会秩序が再編された様子が窺える(註32)。それらは，弘仁二年(811)の海道十駅廃止後に付け替えられたルート上周辺に，意図的に配置された可能性があると推測される。南相馬市広谷地遺跡では，路面幅５ｍ前後，長さ154ｍ以上の南北道路跡が検出され（平成19年度調査），北1.6km 先に横大道の地名が残ることは，この仮説の傍証材料になるのではなかろうか。

これまで陸奥南部の製鉄遺跡は，９世紀前半以前の事例に集中し，「律令国家の対蝦夷政策」という，わかりやすい歴史背景で説明が可能であった(註33)。しかし，この政策が終結した後に営まれた事例は，もはや無視できない存在になっている。中心生産地の移動が示すように，両者間には，本質的な性格の違いが推測される。今回，出現期（近畿・関東）とは別な地域間交流（北陸）の可能性が指摘できたのは，その解明の糸口になるかも知れない。

次年度以降の周辺調査で，さらに検討材料が発見されることが期待される。　（菅　原）